

スポーツの地脈でも論ずべき 新国立競技場

武蔵野美術大学
造形学部教授
松葉一清
Kazukiyo Matsuba



ベルリン五輪と東京五輪

思うところがあって、ベルリンの「オリンピックスタジアム」を訪問した。ドイツ国内で顕著になりつつあるナチズムへの郷愁に驚き、一九三六（昭和十一年）年の五輪の空間を実感するためだった。このスタジアムを舞台にした、ナチスの国際社会向けのプロパガンダ映画『民族の祭典』（レニ・リーフェンシュタール監督）もその視点で見直した。

スタジアムは現役のサッカー場としてエプロン状の屋根が新装され、こぎれいになっていた。

壁の崩壊直後に訪ねたときの、重苦しい新古典主義特有のおぞましさは薄まった。それでも、正面の二本のポールや、日本選手としてマラソンに出場した孫基禎が先頭でトラックに走り込んだ向正面の大きな切欠きも健在で、往時を偲ばせる要素に事欠かなかった。

そのベルリン五輪への、当時の日本国内の関心は高かった。孫と前畑秀子（女子平泳ぎ）の金メダルだけでなく、四年後の一九四〇（昭和十五年）年のアジアで最初の「東京五輪」への期待があった。しかし、大戦前夜の国際情勢緊迫を受け、一九三八年夏に中止が決まり、東京五

輪は幻に終わった。それでも建築専門誌「新建築」が翌三九年二月号で五輪特集を組んで、メインスタジアムに想定した「明治神宮外苑競技場」の改築案など施設計画を一挙掲載したように、「夢で終わらせたくない」という建築関係者の思いは強かった。

願いは、四半世紀後の一九六四年に叶い、五輪を期して新幹線が開通、日本橋に高速道路の高架が覆い被さった。東京五輪にかかる熱意が、都市に充満し、ほとぼりした結果だ。だが、来る二〇二〇年の「東京五輪」に対しての国民感情は、くぐもつていて晴々としなない。そこに「新

国立競技場問題」が影を落としていることを、建築家をはじめ建設業関係者は認識し、理的にこの問題に向き合うべきだとわたしは考える。

土地の文脈を念頭に入れ、 新たな価値観の創造を

神宮外苑の景観が「新国立競技場」を巡る議論のひとつの核になっている。都心に残った緑という観点からは、巨大施設はつくらぬに越したことはない。そもそも明治神宮の外苑なのという点も批判の論拠になっている。しかし、一方で、現在の国立競技場の前身である「明治神宮外苑競技場」をはじめ、「明治神宮球場」「秩父宮ラグビー場」「外苑プール」など、わが国のスポーツ発展を担った「土地の文脈」が忘れられている。スポーツ施設が外苑の景観を形成してきた経緯が、である。

二〇二〇年の「東京五輪」に際しては、このスポーツの「聖地」の文脈を踏まえたメインスタジアム像が論じられなければならない。反対論の前提として「議論することはよいことだ」とする風潮が知識人にあるが、議論が歴史認識を欠いているなら空論にとどまってしまう。

わたしはスポーツ観戦好きで数十回は国立競技場に足を運んだ。神宮球場もそれに倍する回

数、プロ野球の観戦に向いた。この二つの競技場の観戦のアメニティーは国際レベルで語れるものではない。国立競技場の座席の狭さ、神宮球場は座ると前に滑り落ちそうなほどプラスチックティックはつるつる。余談だが「東京ドーム」もひどい。歩幅の合わないスタンドの階段や雨降りに恐々歩く滑りやすい屋外のタイル舗装などだ。

何万人単位の不特定多数の利用者の安全という観点からも、すぐにでも改善すべきだ。日本の建設業界の名譽のためにも、東京のスポーツ施設のボトムアップは急務であり、新国立競技場はその突破口として望ましい。

こうしたスポーツ愛好者なりの視点で、「新国立競技場問題」の報道や建築設計関係者の議論を眺めていると、総合的な景観論からの深まりがない。論者も報道するメディア関係者も、日常的に外苑を利用しているとは思えず、「外野スタンド」にさえないのではと案じられる。

景観に関しては「京都駅ビル」と北九州市の「リバーウォーク」を議論の前提にしてはどうだろう。「京都駅ビル」のミラーガラスで覆われた「腰の引けた外装」は、周囲の破壊された景観を映し出して、悪しき古都の姿を二重像で倍加させた。一方、「リバーウォーク」は、ハーベ

ストカラーの暖かな色彩を大胆に配した「一歩踏み込んだ外装」で、小倉城の歴史環境との対峙関係を構築し、現代の都市景観の形成に成功した。建築家は腰を引かずに、新たな価値の創造に挑戦するのが責務のひとつであり、その観点から新国立競技場案の景観の是非は論じられてしかるべきだ。

複眼の視点で祝福される五輪を

二〇一二年、前回のロンドン五輪賛美に安易に与するの問題が大きい。仮設とされたメインスタジアムは、実際には簡単に解体できないものだ。現に上層の仮設部分はそのままだ、反対に常設とされた下層の座席部分を、競技に合わせて移動させることが決まった。当初、異論の論拠として、ロンドンのスタジアムの「合理性」を掲げたメディアは議論の媒介者として、仮設性の実態の確認を怠り、誤った論調を構築してしまった。

コンペの設定などは批判に値しよう。しかし専門家たるものが、複眼の視点で攻めどころを見定めず、メディアがそれを増幅する構図は断たねばならない。祝福される五輪にするため、不毛の議論に終止符を打つ専門家ならではの知見が求められている。